

奥秩父	飛龍山から笠取山へ縦走	No. 023
-----	-------------	---------

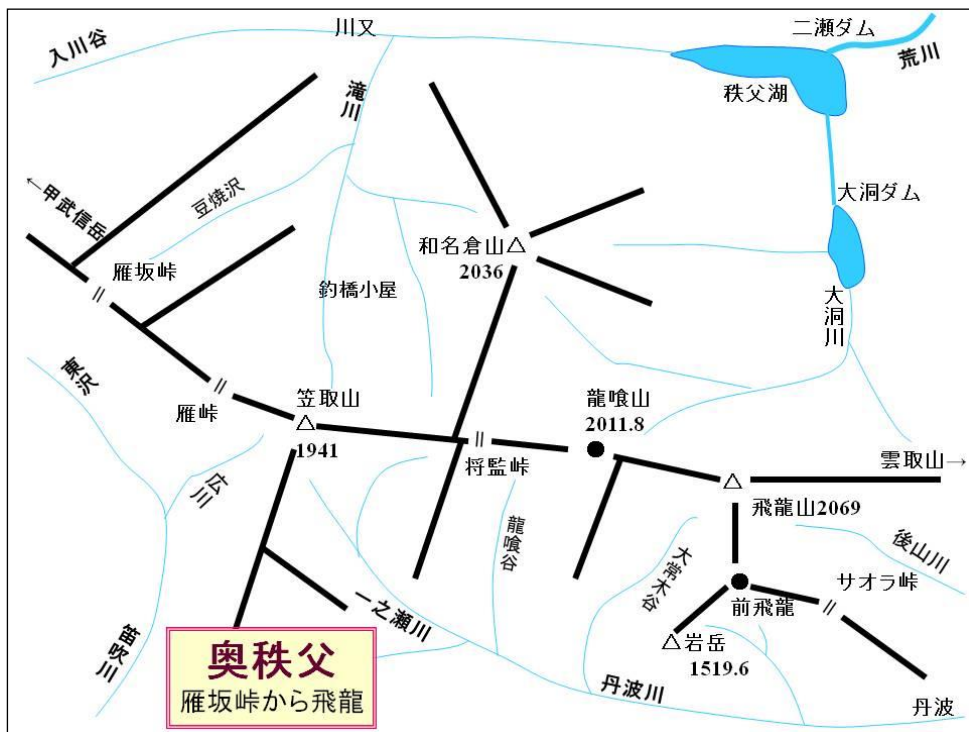
昭和 38 年 11 月 22 日

半ドンで家に帰るとすぐに仕度して、市ヶ谷駅を 15 時 45 分に出発。立川で青梅線に乗り換えて氷川に 17 時 57 分着。駅前でラーメンを食べて、丹波行の最終バス（18 時 45 分発）に乗る。

丹波に降り立つともう 20 時。多摩川の流りに沿って 15 分ほど歩いて、奥秋の丹波山荘へ。

同じバスを降りた女性の二人連れのハイカーがうろうろしているの訊ねると、泊まる場所を探しているというので、同じ宿へと案内する。

実を言うと、私がこの宿を選ぶには深いわけがあった。過去にこの山荘に一泊したことがある人の話では、この山荘には可愛い女の子がいるという。よし、それなら一度拝見しておこうじゃないかというわけでこの山行の日程に入れた。話は元に戻るが、その二人の女性と一緒に山荘に入



っていくと、山荘の人たちは同一パーティと思ったらしく、二階の部屋へ一緒に案内してくれた。同じ部屋に入れられても誰からも不満の声が上らなかったということは、互いに満更でもないと思っていたのだろうか……。年のころは 16、8 か、よく笑う花も恥らう娘たち。彼女らの良く回る舌やよく動く頬の筋肉に見とれている内に、肝心の山荘にいるはずの可愛い子を探すのを忘れてしまった。

宿の食事を食う二人の横で、ジャガイモとタマネギが入った味噌味の雑煮。コッヘルを抱いて黙々と餅4ケを食べ、22 時半就寝。

昭和 38 年 11 月 23 日

起床 4 時 20 分、薄暗いところで飯を炊き、ジャガイモの味噌汁で朝食。残った飯でおにぎりを作り、6 時 20 分に出発。宿賃は素泊まりで 250 円。

前飛龍から奥多摩湖まで伸びる天平（でんでえろ）尾根の中間点あたりにサオラ峠がある。峠への道は青梅街道沿いの神社の脇から始まる。尾根の斜面を巻くように登っていく内は傾斜も緩くて楽だが、海拔 900 m 地点あたりから急登が始まる。1200m を越えるころから、再び小尾根の西側を巻くようになり、カンカン照りの山道を 2 時間ほどでサオラ峠（1414m *注）に到着、8 時 15 分。真っ白な富士山に見とれて 15 分の小休止。（*注：サオラ峠の起源は「竿裏」峠という説がある、意味がわかるような気がする）

火打石谷の頭（別名熊倉山、1624m）から前飛龍（1954m）までは裸の稜線なので、カンカン照りで汗だくになってしまった。11 時、前飛龍でスープを作ってカンパンを食べて 11 時 40 分まで休憩。

12:00 過ぎ、飛龍神社に着く頃はもう汗は出尽くしてしまったようだ。飛龍山頂上直下のハゲ岩で再び 15 分の休憩。カンカン照りを登ってきていくらか疲れが感じられるので、今日の行程は可能なら笠取小屋ま

踏み跡 < My mountains >

で・・・と考えていたが、将監峠までとすることにした。

大常木山(1962m)・龍喰山(2011.8m)は南面を巻くので平坦で歩きやすく、散歩道のようなだ。

将監峠に14時15分、将監小屋に14時40分に到着。

いつも風に踊っているという小屋のシンボルの日の丸の旗が見えない。近づいてみると、旗ざおの中央部にドラムとしている。暇にあかしていただろうか。傍らに荷物を下ろして汗を拭いていると小屋番の若い人が無精ひげ、丸首のアンダーシャツ一枚、首に手ぬぐいを巻いて、暗い小屋の中からのっそり出てきた。

「なんで、こんな旗の立て方してるんですか?」と尋ねると

「なあんだ、おめえ知らんのか、ケネディが死んだこんを」

「え? ほんとですか? からかってんじゃねえかな?」

「バカ言うな、うそ言ってどうするだ、なけえへえってラジオでも新聞でもあるで、見るといい、ほんと今日は半旗上げてるってこんだな」

暗い土間に散らかっている新聞には、ダラスの街角でオープンカーの中に崩れる大統領と、悲壮な表情ですがりつくジャクリーヌ夫人の姿が大きく載っている。奥の方で鳴っているトランジスタラジオは、深閑としたワシントンやウォール街の様子などを報じている。ここまで事実を証明する材料がそろっていながらまったく信じがたい。

夕暮れまでに小屋は満員になった。雑煮を作って夕食を食べながら明日の行動予定を吟味。明日は笠取山・雁峠から釣橋小屋経由で川又へ下ることにした。

19時就寝、目を閉じると、ニューフロンティア・スピリッツを唱える演説風景やフルシチョフ首相との会見の様子などが後から後から脳裏を流れて行く。

昭和38年11月24日

起床4時、雑煮の残りの味噌汁をスープ代わりにして、乾パンで朝食。

5時15分に出発。すでに色づいた草原の朝露をかき分けて歩くと水滴が飛び散りながら朝日に光るのが美しい。牛王院平5時40分、唐松尾山(2109.4m)・笠取山(1953m)は南面を巻いて難なく通過。

この稜線の北側の谷は荒川の水源地、南側の谷は多摩川の水源地になっている。笠取山の南面頂上直下には「多摩川の水源地」として最初の一滴滴が流れ出る場所がある。分水嶺という言葉は味わいがあって好きだ。笠取小屋に8時05分に到着。早く出発するために朝食を軽めにしたので、残った米とサツマイモで芋飯を炊き、もう一度食べ直し。長い下りに備えて力を蓄えることと荷物を軽くすることが狙い。たっぷり食べてゆっくり休憩して英気を養い、9時40分に出発。

雁峠(がんとうげ)9時55分、燕山の丸みが「甘食パン」のように見える。奥秩父の主稜線、特にこの辺りの峰や峠に「雁」の字がつく名前が多い。昔から雁が列をなして山越えをするコースだったらいい。長い下りに備えて靴の紐を締めなおして、10時05分下山開始。

峠からブドウ沢を下り、海拔1500m地点あたりから東側の通り尾根を巻くようについた山道を進む。台風後の崩壊がひどく、最初の一時間の下りはほとんど道とはいえないようなところばかりだった。

通り尾根の北端の1271mピークから枝沢出合いに下り、11時58分に釣橋小屋に到着。狭い沢の小さな段地に建てた小屋でなかなかしっかりとできている。仙人の活動拠点として使われていたのだろうか。

ここでゆっくり昼食をとり、長い下りに備えることにする。

釣橋小屋から滝川谷を左岸に渡り、雁坂峠から東に伸びる黒岩尾根の腹を1200m地点ぐらまで急登すると巻き道になり、やがて林用軌道の線路を歩くようになる。

歩幅と枕木の間隔とが合わず歩きにくい上に、枕木の下に数百mの奈落の底が口を開けており更に釘の緩んだ枕木も混じり、ヒヤヒヤ・ガクガクの連続。

豆焼沢ノ出合い14時50分、本流の荒川の流りに段々近づくとつれて空の広がりを感じられるようになって

踏 み 跡 < My mountains >

くる。16時ちょうどに川又の集落に到着。ここからはトラック道でしかも日没との競争になる。少々速度を上げて歩き、川又から秩父湖の二瀬ダムバス停まで一時間半でたどり着くことができた。時計を見ると17時30分、早い秋の夕暮れ、もう暗くなっていた。三峰口へ行く最終バスは18時45分発。安心感から疲れが出て急に足がだるくなってきた。三峰口駅に着いたのは19時30分。秩父鉄道は19時37分発、熊谷経由で帰宅した。

以上

<後日談>

1999年頃のガイドブックを開いてみたら、雁峠から釣橋小屋へのルートは破線すら描かれていなかった。林業の衰退で造林小屋や林用軌道がなくなってしまったからか、それともこんなハードなコースを選ぶ人はいなくなり、段々に廃れて行ったのだろうか。そればかりか、雁坂峠の下にはトンネルが掘られて、秩父と甲斐を結ぶ幹線道路もできた。谷にはダムができて湖となり発電所ができて、激変した。

(修正・更新:2023年9月)